

## An American Tragedy と『青春の蹉跌』の比較考察

齋藤 昭二

*Hamlet* is a stratification ... it represents the efforts of a series of men, each making what he could out of the work of his predecessors.<sup>1)</sup>

— T.S. Eliot, 'Hamlet', 1919 —

## I

芥川龍之介(1892-1927)の短編の多くはそれぞれその話の原型となる物語が『今昔物語集』等の古典や切支丹資料にある。シェークスピア(William Shakespeare, 1564-1616)の劇作品にも『プルターク英雄伝』やホリンシェッド(Raphael Holinshed, 1529頃-1580頃)の『年代記』(*Chronicles of England, Scotland, and Ireland*, 1577)等の原典がある。但し、芥川はその筋を踏襲しながらも、登場人物を生きいきと描き出し、その内面心理の動きをまるで解剖医の鋭利なメスを使ってでもあるかのように細密に分析してみせる。また、シェークスピアも原典の再現にとどまらず、劇的な瞬間に人間を捉え、その本質を垣間見させる。例えば、*Hamlet* (1600-01)では、トマス・キッド(Thomas Kyd, 1558-94)作とされる *der Ur-Hamlet* 等の原典を下敷きとしながらも、主人公ハムレットを「表現し得ない感情に支配されている」<sup>2)</sup>と改変することにより、青年期の不可解な一面を結晶化した。こうした場合、作家のオリジナリティーは改変の仕方に存するのである。

セオドア・ドライサー(Theodore Dreiser, 1871-1945)は、1906年に起こったジレット＝ブラウン事件など同種の犯罪15件以上に取材した<sup>3)</sup>後、1925年に『アメリカの悲劇』(*An American Tragedy*)を書いた。石川達三(1905-1985)は、1966年に佐賀県で起こった天山事件<sup>4)</sup>に着想の

一部は得ているものの、恐らくドライサーの『アメリカの悲劇』を下敷きとして1968年から『青春の蹉跎』の連載を始めたと思われる。それほどこの二つの作品はよく似ている。文体、時代背景、主人公の境遇、筋の展開などはそっくりである。

しかし、読後感はまったく異なる。同じ素材を使っても、それぞれの作者の表現したいことが異なるので、その素材の一部が異なる形に改変されているのである。この小論では、表面的な類似性に潜む相違点に着目することにより、それぞれの作者の表現したいことに迫ってみたい。

## II

ドライサーは21歳の時にシカゴの *Daily Globe* 誌の記者となり、その後数年間を新聞記者として働いた経験を持つ。『アメリカの悲劇』を執筆する際には、ジレット＝ブラウン事件の現場となったビッグ・ムース湖周辺の視察はもとより、膨大な裁判記録を何度も読み、実際の刑務所も見学した<sup>5)</sup> という。そんな彼が書く物語の冒頭場面を見てみる。

Dusk — of a summer night.

And the tall walls of the commercial heart of an American city of perhaps 400,000 inhabitants — such walls as in time may linger as a mere fable.

And up the broad street, now comparatively hushed, a little band of six, — a man of about fifty, short, stout, with bushy hair protruding from under a round black felt hat, a most unimportant-looking person, who carried a small portable organ, such as is customarily used by street preachers and singers.<sup>6)</sup>

(夕暮れ — ある夏の宵)

およそ人口40万人の、あるアメリカの都会の商業中心地にそびえる高い壁 — 時が経てば単なる伝説になってしまうかもしれないような壁。

今やかなり静かになった大通りを6人の小さな集団が歩いてゆく — 50歳くらいの男は背が低く、ずんぐりして、まるい黒のフェルト

帽の下からふさふさの髪をはみださせ、風采はあがらず、辻説法師や流しの歌い手が使うような小型の携帯オルガンを持っていた。）

感情移入を抑え、対象を冷静客観的に描くジャーナリスティックな文体であり、アメリカ自然主義文学のリアリズムを持っている。

一方、石川達三も22歳の時に『国民自論』社に就職したり、戦時中は海軍報道班員として東南アジアを取材するなどの経験から、ルポルタージュ風の文体でも知られている。そんな彼は物語の冒頭近くの場面をこんな風

に書いている。

江藤は煙草をくわえ、高い足音をひびかせてこの街を歩きながら、眼に見えない法律の重さを考えていた。街の人たちは眠っている。眠っている間にも法律は彼等を拘束している。一体どれだけの法律が彼等の行動を規制しているだろうか。商法の中のたくさんの条文、有限会社法、手形法、商業登記規則、それから彼等にとって最大の悩みの種の税法。民法の方では地上権に関する法律。債権債務に関する法律。親族法と相続法。婚姻法と戸籍法。借地借家法。義務教育法。行政法の方では道路法、道路交通法があり、建築基準法があり、さらに業種によっては薬事法とか医師法とか、公益質屋法とか食品衛生法とかの取締りを受け、そのうえ経済関係の無数の法律が彼等の生活にからんで来る。おそらく一軒の商店の主人の、生活と営業とに関連をもつ法律条文の数は、一万条、一万五千条にも達するに違いない。<sup>7)</sup>

彼のもまた新聞記事を思わせるような文章である。

両作品の主人公もまた似ている。『アメリカの悲劇』の主人公クライド・グリフィス (Clyde Griffiths) は貧しい辻説法師の息子で、何とか自らの貧しい境遇を抜け出し、豊かな暮らしをしたいと望む若者である。「青春の蹉跌」の主人公である江藤賢一郎もまた貧しい母子家庭で育ち、頭が良かったために、学資の援助を伯父から受け、大学の法学部に進む。彼は法律を武器として、社会の上層部に這い上がろうと考える若者である。

時代背景も、『アメリカの悲劇』(1925)が“クーリッジ時代の繁栄”<sup>8)</sup>という未曾有の好景気に沸くアメリカ。『青春の蹉跌』(1968)が高度経済成長期の日本である。共に上昇志向が至上の価値とされた時代である。

舞台は、『アメリカの悲劇』は大都会のシカゴや実際に犯行が行われたコートランド (Cortland) を模した架空の都市ライカーガス (Lycurgus) であり、『青春の蹉跌』は大都会東京である。

物語の筋立ては、両作品とも、貧しい青年が社会の上層部を目指して這い上がろうとする過程で過去に関係のあった女性が邪魔となり、これを殺害しようと企てるというものである。裕福な令嬢との結婚を通して社会の上層に這い上がる可能性が見えてきた時点で、過去の恋人の妊娠が明らかとなり殺意を抱く点や犯行の場面に湖上のボートが使われるなどそっくりである。

### Ⅲ

しかし、微妙に違う点もあり、その点こそそれぞれの作者が自己の表現したいことを効果的に描き出すために行った演出である。

違う点の1つは主人公の性格である。『アメリカの悲劇』のモデルとなったジレット＝ブラウン事件の犯人ジレットは“世慣れたプレイボーイ”<sup>9)</sup> だったそうだが、それをドライバーは『アメリカの悲劇』で、どのように描写しているか。物語の冒頭で主人公クライド・グリフィスが読者の前に初めて姿を現す場面である。

The boy moved restlessly from one foot to the other, keeping his eyes down, and for the most part only half singing.<sup>10)</sup>

“That oldest boy don’ t wanta be here. He feels outa place, I can see that. It ain’ t right to make a kid like that come out unless he wants to …”<sup>11)</sup>

貧しく自分の教会さえ持てない聖職者の父が家族を連れ、街角で賛美歌を歌い、辻説法をする。まともに耳を傾ける通行人などはなく、恥ずかしさで少年は「片方の足から他方の足へと体重を移しながら落ち着きなく動き、歌はおおかた半ばしか歌っていなかった」。「ここには居たくなく、場違いに感じている」と、いかにもおとなしそうな少年である。

青年期のクライドについては、彼の伯父のこんな評言がある。

“He’s quite good-looking and well-mannered, too — about your own age, I should say, …”<sup>12)</sup>

“He’s only a bell-hop in the Union League Club in Chicago, at present, but a very pleasant and gentlemanly sort of a boy, I will say. …”<sup>13)</sup>

シカゴのホテルで甥に会った伯父は一目でこの青年を気に入り、ライカーガスにある自分の会社で仕事を与えようと考え、事前に彼のことを家族に話している場面である。「とてもハンサムで行儀もいい」「愉快で紳士的な青年」であると伯父はクライドのことを表現している。

またもう一つ彼の性格を彷彿とさせる場面がある。伯父の会社で働き始めた彼はそこで同僚のロバータ・オールデン (Roberta Alden) のことを密かに好きになる。会社からは同僚の女性と特別な関係にならないようにと忠告をされていることもあるが、彼はその気持ちをなかなか彼女に伝えることができない。そんな気持ちを静めるために週末になると一人で近くの湖に行き、泳いだりボートを漕いだりしていた。そのような6月のある日曜日の午後、ボートを漕ぎながら彼はこんな物思いに耽る。

If only he might venture to talk to her more — to walk home with her some day from the mill — to bring her out here to this lake on a Saturday or Sunday, and row about — just to idle and dream with her..<sup>14)</sup>

「ああ、もっと彼女と話す勇気があったらなあ」と溜息をつく。思いを寄せる女性に気楽に話しかけることもできないのである。

作者ドライサーは主人公の青年をどこにでもいるような、そしてどちらかと言うと、おとなしい内気な青年と変えている。

一方、『青春の蹉跌』の主人公である江藤賢一郎はどんな性格に設定されているか。先に触れたように、彼は法律を武器として社会の上層部に這い上がろうという野望を抱いているが、貧しい母子家庭のため、学資の足

しとして家庭教師をしていた。教え子の大橋登美子は短大に合格するが、その後も頻繁に手紙をよこす。

読み終わった手紙を、彼はこまかく裂いて屑かごに投げ入れた。これまでに登美子から来た三十通ちかい手紙の、どの一つとして手もとに残ってはいなかった。…彼女からの手紙を裂いて捨てたのは、後日の証拠を残さない為だった。彼女とつきあいがあったという証拠を残すことが嫌だった。<sup>15)</sup>

法学部の学生らしく冷静かつ非常に慎重な性格の持ち主であることが窺える。

また、彼の別の面を示すために次のような挿話が入られている。登美子とスキーに出かけた志賀高原の頂上付近で吹雪かれ、二人は急いで下山する途中に凍死した男女の遺体を発見する。女を庇うように亡くなっている男の姿に「ほんとに愛していたのね。すばらしいじゃない？…あの女のひと、幸福だわ。もし私があんなになったら、先生どうする？…私と一緒に死んでくれる？」と登美子は感動するが、賢一郎は

おれは死なない。死んでたまるものか…と江藤は思っていた。おれの命は、登美子ひとりを助けるために死んでもいいような、そんな安っぽい命ではない。おれには無限に大きな未来がある。おれは多くの人たちから将来を期待されているのだ。母はおれの未来にすべてを賭けている。父の遺言によっておれに学資を出してくれている伯父も、おれの将来に期待をかけている。もしかしたら伯父は、彼の三女の結婚の相手としておれを考えているかも知れない。父の異母兄にあたる伯父は製陶会社の社長で、数億の資産を持っている。…

この夏から秋にかけて、彼は司法試験を受ける予定だった。合格すれば、判事検事にもなれるし、高級官吏にもなれる。大学に残って教授の地位につくこともできる。その自負と野心とが彼をエゴイストにしていた。…<sup>16)</sup>

自分の将来を信じて疑わない自負心の塊のような性格である。従って、登美子に対しても「向うが愛しているらしいのに、こちらは全く冷静だとい

うことに、一種の優越感があった。」<sup>17)</sup> という傲慢な態度を取っている。

ほぼ同じ筋立てなのに、『アメリカの悲劇』のクライド・グリフィスはどこにでもいるような普通の、どちらかと言うとおとなしい青年であり、『青春の蹉跌』の江藤賢一郎は冷静で慎重な自負心の塊のような野心家であるという違いを見せている。

#### IV

微妙な違いは実際に行う犯行の内容にもある。『アメリカの悲劇』のクライドは伯父の娘の友人であるソンドラ・フィンチリー (Sondra Finchley) という令嬢との結婚を通して上流社会へ這い上がる可能性が見えてきた時点で過去の恋人ロバータが邪魔になると恐れ、その殺害を考える。彼女を誘い出し、湖の上でボートを転覆させることを試みるが、怖くてできない。しかし、皮肉なことに、

Yet (the camera still unconsciously held tight) pushing at her with so much vehemence as not only to strike her lips and nose and chin with it, but to throw her back sidewise toward the left wale which caused the boat to careen to the very water's edge. And then he, stirred by her sharp scream, (as much due to the lurch of the boat, as the cut on her nose and lip), rising and reaching half to assist or recapture her and half to apologize for the unintended blow — yet in so doing completely capsizing the boat — himself and Roberta being as instantly thrown into the water. And the left wale of the boat as it turned, striking Roberta on the head as she sank and then rose for the first time, her frantic, contorted face turned to Clyde, who by now had righted himself.<sup>18)</sup>

クライドの態度を不審に思い駆け寄ろうとした彼女を彼が反射的に跳ねつける。その瞬間偶々手に持っていた彼のカメラが彼女の顔面を直撃する。彼女は倒れ、鼻と唇を切ってしまう。これが引き金となり、ボートはバランスを崩し、転覆する。二人は水中に投げ出され、さらにボートの左舷が

彼女の頭を強打する。クライドは彼女を助けようとするが、その時、彼の耳元で悪魔の声が囁く。

“But this — this — is not this that which you have been thinking and wishing for this while — you in your great need? And behold! For despite your fear, your cowardice, this — this has been done for you. An accident — an accident — an intentional blow on your part is now saving you the labor of what you sought, and yet did not have the courage to do!”<sup>19)</sup>

「これこそお前の望んでいたことじゃないのか？」という悪魔の囁きにクライドの体は動かず、結局ロバータは溺死してしまう。しかし、あくまで全ては事故という形で起こったのである。

その後、クライドは検挙、起訴され、裁判となるが、不運なことに敏腕検事メイソンの手にかかり、ロバータの顔面の傷のみならず頭部の致命傷となった打撲さえもクライドの明白な殺意のもとに彼によって加えられたものであるとされ、一般人から成る陪審員もこれを信じ、クライドに有罪死刑の判決が下されてしまう。

一方、『青春の蹉跌』の江藤賢一郎も大会社の社長である伯父の娘康子との結婚という上流社会への入口が見えてきた時点で登美子の妊娠が明らかとなり、その殺害を計画する。決行の日のアリバイを慎重に組み立てた上で、計画通り登美子と箱根に行き、芦ノ湖でボートに乗るが、ここでは果たせず、ようやく近くの林の中で彼女が首に巻いていたマフラーを締め、殺害する。

逮捕は織り込み済みで、取り調べにも余裕を持って望み、当日のアリバイを聞かれても

十七日ですか、ええと…十七日というと火曜日ですね。学校へ行きましたよ。<sup>20)</sup>

と慎重に作り上げておいた行動を詳細に語り始めるが、これが却って裏目に出る。

刑事は目を据えて彼の顔を見つめ、

「よくそれだけ覚えているなあ」と言った。「たいていはそんなにはっきり覚えているもんじゃないだよ」

彼はこめかみのあたりで脈拍ががたんがたんとう鳴っているのを感じた。虚偽を真実につくり替えることのむずかしさが、胸を圧迫してくるようだった。<sup>21)</sup>

余りにも綿密なアリバイが却って刑事の疑惑を買ってしまったのである。慎重な性格が計算ミスという形で自信家の彼を裏切ったのである。計算ミスはさらに続く。得意の法律を使ってこの窮地を抜け出そうと、六法全書を求める。

「ひとつ頼みがあるんです」と彼は言った。

「何だ」

「六法全書が有ったら貸して下さい」

「ふむ…六法全書を、どうするんだ」

「僕は、いまこんな不当な取扱いをうけているんで、これに抗議するための法律手続きを、ちょっと調べて見たいんです」

刑事はしばらく黙って彼の顔を見ていたが、やがて重い口調で言った。

「お前は法科の学生だったな。…そんならお前は解っている筈だ。法律というものは善良な庶民の味方だ。しかし、犯罪人の見方なんかしてくれやしないよ」

法律のことならこの刑事よりも江藤の方が、十倍もよく知っている。けれどもいま彼は、ひとことの反論も抗議もできなかった。<sup>22)</sup>

彼が上流社会へ這い上がる武器として使う筈だった法律が今は逆に彼を追い込んでいるのである。計算ミスはさらに続く。登美子を殺害する動機となった妊娠について、刑事が意外な事実を明らかにする。司法解剖の結果、登美子のおなかに居た子供の血液型はAB型で、江藤の子供ではなかったことが告げられる。登美子が江藤のみを愛していたというのも彼の思い上がりだったのである。自分は完璧であるという自負心からくる計算はことごとく彼を裏切ったのである。

## V

こうした改変は、そしてその違いは明らかに二人の作家の明白な意図に基づく。ドライサーは『アメリカの悲劇』において、貧しい辻説法師の息子クライド・グリフィスが、性格はおとなしく温厚であるにもかかわらず、上流社会へと這い上がる“アメリカン・ドリーム”を追い求めるあまり一瞬とはいえ自らの人間性を失い、人を見殺しにし、またそれがあくまで事故でありながら、敏腕検事と陪審員によって全て彼の殺意に満ちた犯行とされ、破滅してゆく様を描き、これは“アメリカの生んだ悲劇だ”と糾弾したのである。一方、石川達三の『青春の蹉跌』の場合はどうか。“蹉跌”とは“躓き”である。石川達三は構図と筋はほぼそのままのものを用いながら、主人公である江藤賢一郎の性格を若さにありがちな傲慢で自負心に満ちたものに変え、それに“躓いて”破滅する過程を描くことで、より普遍的な青春像を捉えようとしたのである。

両作家のオリジナルな改変はそれぞれ成功を収め、共に文学史上に残る名作となっている。

## Notes

- 1) 『『ハムレット』という作品は一つが多層体であり…それぞれ先人の作品を基にでき得る限り作り上げた、一連の人たちの努力の集大成なのである』(T.S. Eliot, 'Hamlet', 1919, in *Selected Prose of T.S. Eliot*, Faber, 1975, p. 46)
- 2) “Hamlet (the man) is dominated by an emotion which is inexpressible …” (*Ibid.*, p.48)
- 3) 『ドライサー (20世紀英米文学案内11)』(研究社、1967), p. 148
- 4) 『朝日新聞土曜版』(2006年11月4日)
- 5) 前掲『ドライサー』, p. 148
- 6) Theodore Dreiser, *An American Tragedy* (Signet Classics, 2010), p. 1
- 7) 石川達三、『青春の蹉跌』(新潮文庫、昭和46年), p. 11
- 8) 1920年代のアメリカ研究である F.L.アレン著『オンリー・イエスタデイ』は第7章を“クーリッジ時代の繁栄”とし、この時代の好景気を説明し

ている。

- 9) 大浦暁生, 「『アメリカの悲劇』の成立と背景」(『ドライサーⅡ』集英社版世界文学全集64, 1986, 所収) によれば, 「ジレットは世慣れたプレイボーイで、オハイオ州のオーバーリン大学に二年間在学し、ハワイにも旅行したことがあり、グレイスとの関係もそれほど秘密ではなかった。裁判の間も大胆不敵にガムをかみつづけていた」(p. 421)という。
- 10) Dreiser, *op.cit.*, p. 3.
- 11) *Ibid.*, p. 5.
- 12) *Ibid.*, p. 158.
- 13) *Ibid.*, p. 158.
- 14) *Ibid.*, p. 265
- 15) 『青春の蹉跌』, pp.25-26.
- 16) 同上, p. 58.
- 17) 同上, p. 22
- 18) Dreiser, *op.cit.*, pp. 513-514.
- 19) *Ibid.*, p. 514.
- 20) 『青春の蹉跌』, p. 228
- 21) 同上, p. 229.
- 22) 同上, pp. 237-238